

第36回

全国中学生 人権作文コンテスト

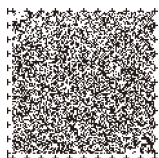
入賞作文集



人権イメージキャラクター
人 KEN まもる君



人権イメージキャラクター
人 KEN あゆみちゃん



この冊子には、音声コードが、各頁
(奇数頁 左下、偶数頁 右下)に印
刷されています。
専用の読み上げ装置で読み取る
と、記録されている情報を、音声で
聞くことができます。

Human Rights

法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会



第36回全国中学生人権作文コンテスト中央大会表彰式 (平成29年1月6日(金))



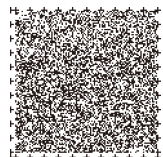
受賞者の皆さん, 金田法務大臣, 落合審査員長

内閣総理大臣賞を受賞した旭川市立永山中学校2年紙谷桃歌さん(写真右から2人目), 法務大臣賞を受賞した久留米市立田主丸中学校3年栗木乃愛さん(写真左から2人目), 文部科学大臣賞を受賞した栗原市立若柳中学校3年星日菜さん(写真右端)の3人を法務省にお招きし, 金田勝年法務大臣(写真中央)から表彰状とトロフィーを贈呈しました。

表彰式には落合恵子審査員長(写真左端)のほか, 受賞者の御家族も出席されました。



受賞者(前列左から2~4人目)とその御家族(後列)

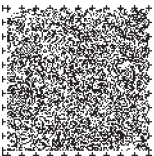


第三六回

全国中学生人権作文コンテスト

入賞作文集

法務省人権擁護局
全国人権擁護委員連合会



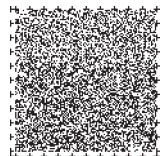
はしがき

法務省と全国人権擁護委員連合会は、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、昭和五六年度から「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しています。

本コンテストは、次代を担う中学生が、人権問題についての作文を書くことにより、人権尊重の重要性、及び必要性についての理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身につけることを目的として実施しているものです。

三六回目となった平成二八年度は、各都道府県単位（北海道については、札幌法務局及び函館、旭川、釧路の各地方法務局単位）で実施された地方大会に、七、三三八校の中学校から九七万二、五五三編にも及ぶ多数の作品が寄せられ、中央大会には、地方大会の審査を経た代表作品一〇三編が推薦されました。

この作文コンテストへの応募作品は、いずれも中学生らしい感性に富み、純粹な感覚で人権問題をとらえたものばかりであり、応募された皆様の真しな姿勢には心を打たれるものがあります。

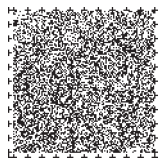


この作文集をより多くの方々に御愛読いただき、人権尊重の輪が更に大きく広がることを願ってやみません。

おわりに、この作文コンテストの実施に当たり、多大な御尽力をいただいた全国各地の教育委員会、及び中学校等関係各方面の皆様方に対し、心から感謝を申し上げます。

平成二九年二月

法務省人権擁護局
全国人権擁護委員連合会



目次

【審査講評】

中央大会審査員長

落合 恵子
おちあい けいこ

6

【入賞作文】

内閣総理大臣賞

日本のいじめ対策は間違っている

北海道・旭川市立永山中学校二年

紙谷 桃歌
かみや ももか

10

法務大臣賞

CHILD LABOUR

福岡県・久留米市立田主丸中学校三年

栗木 乃愛
くりき のあ

14

文部科学大臣賞

輝く未来を生きるために

宮城県・栗原市立若柳中学校三年

星 日菜
ほし はるな

18

法務副大臣賞

ハンセン病を知って学んだこと

栃木県・宇都宮市立一条中学校二年

東 大我
ひがし たいが

22

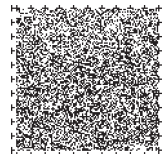
法務大臣政務官賞

「小さな人権」

福島県・須賀川市立第二中学校一年

須田 日菜子
すだ ひなこ

26



全国人権擁護委員連合会会長賞

パン一つ買えない日本

一般社団法人日本新聞協会会長賞

なぜ、祖父母と向き合えないのか

日本放送協会会長賞

感謝

法務事務次官賞

私を生きる

僕の色から見えたこと

長野県・学校法人松商学園松本秀峰中等教育学校二年

大分、今日も元気です

大分県・大分大学教育学部附属中学校三年

香川県・高松市立太田中学校二年

藤村 勇斗

30

埼玉県・狭山市立中央中学校三年

齊藤 美沙子

34

高知県・須崎市立須崎中学校三年

村上 一矢

38

東京都・新宿区立四谷中学校三年

上田 倫子

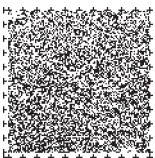
42

木山沢 奏斗

46

佐藤 千慧

50



審査講評

「橋をかける」

中央大会審査員長

わちあい
落合 恵子

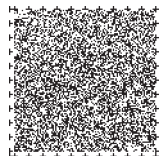
壁も倒せば、橋になる……。

それぞれのあなたの作品を拝読しながら、思い出した一節です。

アメリカ合衆国の作家であり人権の活動家であるアンジェラ・デイヴィスさんという女性のことばだと記憶しています。

このことばの「壁」という部分を、差別や差別意識だと考えることもできます。差別意識（あるいは差別そのもの）の解消は、そこに「壁」が存在することに気づくこと、あると認識することから、すべては始まります。

壁の存在に気づかないことはそのまま無意識であっても壁を認めることになるのですから。この気づきの瞬間（clickと言います）はとても大事なものです。そして残念なことに多くの大人は、壁に慣れてしまったか、堅牢な壁の厚さに圧倒され、「どうせ」を迎え入れてしまっているのか



もしれません。

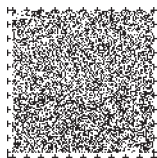
けれど、どうか失望しないでください。決して多数とは言えないかもしれませんが、なんとか差別という壁を倒そうと踏ん張っている大人もいるのですから。それぞれの作品の中にも、そういう大人が登場するのも、嬉しいことです。

そこに壁があったら、「しかたないや」と引き返すか、力をこめて倒す努力をするかで、人生の景色は確実に変わるものだとはわたしは確信しています。大事なことは壁に気づく想像力を育むこと。壁から逃げるのではなく、「倒すための努力」を絶え間なく続けることでしよう。

この、長く熱い努力の過程こそ、まずは大事にしたいと思います。

紙谷桃歌さんの『日本のいじめ対策は間違っている』。「いじめのストッパー」の必要性、その「ストッパー」になるため必要不可欠な三つの要素について記した作品です。紙谷さんは時に「協調性が悪い方向」に傾く場合についても指摘しています。そう、「空気を読む」とか、「同調圧力」がそれです。みんなと「違う」ことをおそれる気持ち、ストッパーになることで孤立するのではないかという不安。これらが、いじめを「当事者間」の傷にしてしまうのです。ひとりの大人としてわたしも人権を侵害するものの、ストッパーであることを約束します。

今回の応募作品は今までなかったテーマを取り上げたものもあります。栗木乃愛さんの『CHILD LABOUR』。わたしたちは、どの国のどの社会に生まれてくるかを選ぶことはできません。レアメタルをはじめとして、日本では予想もつかない最低賃金で、それも劣悪な環境で、何かを発掘したり組み立てをしたり、洋服の縫製



をしたりしている人々がいます。栗木さんが書いておられるように、「大人達の争いによる貧困の犠牲になっっているのは、私たちと同じように未来のある『こども』なのです。人気のファストファッションは、どこでどのようにして誰によってつくられていのでしょうか。大事な提案をありがとうございます。余談ながらわたしが東

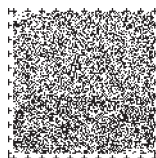
京と大阪に子どもの本の専門店をオープンして四〇周年を迎えました。そこにあるブラジルやフィリピン、その他の国のファッション雑貨などは、フェアトレードで輸入したものです。そして、そういったものを積極的に選ぶひとも徐々にではあるのですが、増えている実感があります。栗木さんのように、まず事実を知るところから、世界の姿が新しく見えてきます。

星日菜さんの重い障がいのある弟さん。その弟さんの存在を通して、紡がれていく人間関係と深められていく理解。「命の輝きに差はない」という言葉が心に深く響きます。

『ハンセン病を知って学んだこと』を書かれた東大我さん。平沢さんの姿勢と思想を、今度は東さんがあなたのやりかたで、継いでいく時代がそこまで来ています。

須田日菜子さんの五歳の記憶。レジに並んだ人たちの拍手が聞こえてきます。この中のひとりでも、強引で横入りをした客に、「順番間違えていますよ」と言っていたら、スーパリーの素敵なマネージャーさんの手を煩わせることもなかったのですが、それが何であれ、不当なことには声をあげる最初のひとりでありたい、とわたしも思います。

藤村勇斗さん。「一人一人がもう少し心に一センチでもいい、異なるものを受け入れるすき間を」。その言葉が印象的です。



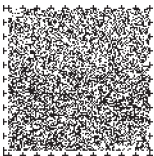
齊藤美沙子さん。作品を拝読して、重い認知症の母と共にあった七年間を思い出し出しています。母を見送ったあと、しみじみと思いました。ケアをしていたつもりの母の存在そのものに、わたしはケアされていたのだ、と。

村上一矢さん。車椅子バスケのあなたと、二〇二〇年に会えることを願っています。

上田倫子さん。木山沢奏斗さん。ひとはみな、「自分自身」という少数派を生きているのですよね。「違い」は人と人とを隔てる溝ではなく、出会い、学び合うかけがえのない時空であり、場であるはずです。

佐藤千慧さん。今日の大分は晴れていますか？ 過酷な体験の中から生まれる確かな対策、互助の姿勢、被災地から遠く離れて暮らすひとより学びたいですね。

これから先も「あなた」は様々な差別や矛盾に出会う可能性があるのでしよう。が、どうか勇気ある少数派でいてください。社会を人権から望ましい方向へと変えてきたのはいつだって、「あなた」のようなひとだったのですから。

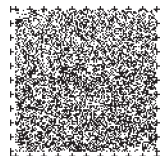


内閣総理大臣賞

日本のいじめ対策は間違っている

北海道 旭川市立永山中学校 二年

紙谷 かみや
桃歌 ももか



今、日本の学校や様々な所で問題となっている「いじめ」。日本は、いじめを防止するために様々な対策を実施しています。例えば、学校側はカウンセラーの協力を得ながらいじめを受けた生徒を継続的に支援する、いじめを行った生徒には別の教室で授業を受けさせる、道徳教育の充実、などのものです。しかし、これらは本当にいじめ防止の根本的解決につながっているのでしょうか。

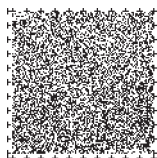
そもそも日本のいじめの一番の問題点は、長期間にわたって続き、陰湿化しやすい点だと思います。私は小学校五年生の頃までドイツに住んでいて、ドイツで起きていたいじめも目の当たりにしましたが、日本とは違って、暴力的な代わりに少しも長続きせず、ほとんどが一日で終わってしまうものばかりでした。では、なぜ日本のいじめは長期化しやすいのでしょうか。

それには、二つの原因があると思います。一つ目は、日本の根本的ないじめのあり方にあります。例えば、ドイツで「いじめ」といったら、大抵校庭などのひらけた場所で下級生など自分より弱そうな相手や、気に食わない相手に暴力を加えることを指します。この種のいじめは暴力的で、比較的目的に付きやすいので、すぐに先生の指導が入り、長続きすることはほとんどありません。一方日本で「いじめ」といったら、暴力よりもどちらかといえば嫌がらせや集団無視などの精神的苦痛を与える行為を指します。このやり方だと、表面上は何もなさそうに見えるので、周りからは気付かれにくく、結果、先生方など学校側の対処も遅れてしまいいじめが長続きしやすくなってしまいます。

二つ目は、周りの見ている人達の反応です。私も一、二度、ドイツで上級生にいじめられたことがあったのですが、どの時も必ずそばにいた同級生や知り合いが味方になってくれて、協力していじめっ子を追い返していました。私の経験に限らず、いじめを見たら必ず周りの人達が止めに入ったり先生を呼んだりなどしていました。しかし、私に通っていた日本の学校で一度いじめが起きた時、気の毒に思いながらも誰も助けようとはせず、むしろどこか逆らってはいけないうな雰囲気は漂っていました。

つまり、いじめのストッパーとなるものがなく、どんどんエスカレートしていったら、長期化してしまうのです。ではどうすれば、「いじめのストッパー」になれるのか。

これは個人の考えですが、「いじめのストッパー」になるには必要不可欠な三つの要素があると思います。一つ目は、正しい善悪の判断ができること。二つ目は、自



分の意見を持つこと。そして三つ目は、他人の意見を尊重すること。日本人はこの三つの中の二つ目と三つ目はとても良くできていていると思うのですが、二つ目の「自分の意見を持つ」に関しては意識できていない人が多い気がします。

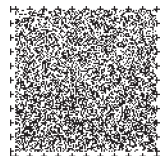
日本人は周りに合わせることを良しとするので、協調性にとっても優れているので

すが、いじめの場合、この特徴は悪い方向に行きがちです。いじめは大抵一人対大勢なので、周りの人達は自然と人数の多いいじめの側についてしまうのです。こういう場合には、自分の意見を持ち、周りに流されずきちんと主張することが重要になります。私はこれこそが今の日本人が「いじめのストッパー」になるために最も必要なことだと思います。

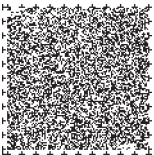
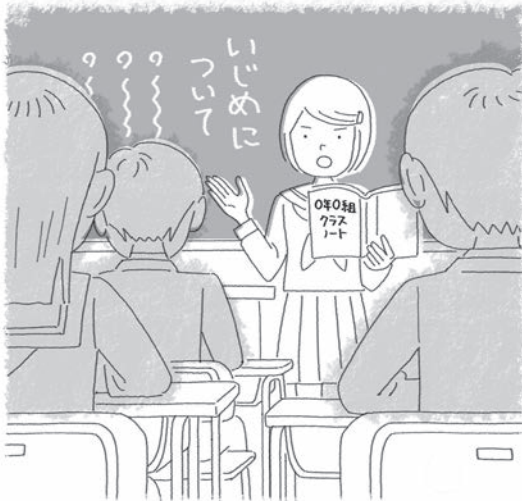
私に通っていたドイツの学校では、クラスの誰もが最近起きた問題・もめごとを書き込めるノートがあり、毎週金曜日の最後の授業で行われる学級会議でそれを開き、書かれている内容の一つ一つを全員で話し合いながら解決していく、という活動がありました。

日本でも、こういった活動を取り入れてみてはどうでしょう。一つの問題に対して真剣にそれぞれの意見を交流し、全員で良い方向に進めようとする。このような場をつくることで正しい善悪の判断、自分の意見を持つ、他人の意見を尊重するという能力を養うことができると思います。

今の日本のいじめ防止対策は、いじめを受けた人の救済を重視していますが、いじめを外野から見ていた周りの人たちには、あまり目を向けていない気がします。これでは、いじめを根本的に撲滅することにはつながりません。もっと生徒に自分の意見を持ち、主張させる機会を増やし、基本的人権について自分なりの意見を持たせるべきです。それが、私達が将来自分達の基本的人



権を守っていくための力になると思います。

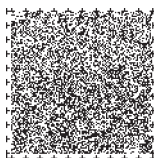


法務大臣賞

CHILD LABOUR

福岡県 久留米市立田主丸中学校 三年

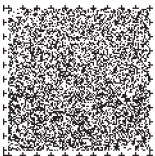
栗木 乃愛



夏休みのある日、部活動から帰宅して、いつものように冷蔵庫に直行していた私は、台所のテーブルの上にぼつんと置かれた一枚のクリアファイルに足をとめた。それは、私の好きな絵本作家 デイック・ブルーナさんのイラストがのったクリアファイルだった。描かれていたのは、一人の男の子で、私が幼い頃からなじみのあるうさぎのミッフィーちゃんではなかったのだが、「かわいいなあ。」と思いつながら手に取った瞬間、その中央にかかれた男の子の目の下に一粒の大きなしずくが描かれていることに気がついた。「涙」だった。「えっなんで泣き顔なんだろう。」と不思議に感じて、よく見てみると、その泣き顔の男の子は、黄色い細長い何か板のようなものを何枚か抱えていた。また「えっ。」と一瞬、私はその絵の意味することが理解できず、すぐに男の子の上の方に書かれた英語の言葉を読んでみた。赤いブロック体の太文字で、「STOP! CHILD

「LABOUR」と書かれていた。「CHILD」は、英語の授業で習ったことのある単語だったので、「子ども」という意味だとすぐ分かった。しかし、その次の「LABOUR」はさっぱりわからなかった。でも、このときの私は、この男の子が泣いている理由をどうしてもすぐに知りたかったので、急いでとなりの部屋の本棚から英和辞書を持ってきて調べてみた。「labour」一・労働 二・労働者 三・労働する とあった。詳しくみると、「骨の折れる仕事」とも書いてあった。私の頭の中は、イラストの男の子のかわいらしいイメージと「LABOUR 労働」という言葉のきついイメージがぶつかり合って、強い違和感と何とも言えない切ない気持ちでいっぱいになった。

とりあえず台所から持ってきたひんやりと冷えたジュースを飲みながら、私は自分専用のタブレット端末をひらき、そのクリアファイルの裏面にかかれたアドレスを入力してみた。するとそこは、世界中の人権にかかわるさまざまな問題やニュースの掲載であふれていた。思わず「ええっ、こんないろいろな人権問題があるんだ。」と、とても驚いてしまった。それぞれの問題について、国別またはトピック別に選んで閲覧できるようにになっていた。そして私は、もちろん真っ先に「児童労働」と書かれた文字をタッチしてページを開いてみた。まず、あどけない表情の男の子が何かを持ち上げようとしながらこっちを見ている写真があった。つづけてスクロールしていくと、裸足や破れたサンダルをはいた子どもたちが、がれきの上でしゃがんで何かしている写真が現れた。おなじ年頃の子どもたち同士で一緒に楽しく遊んでいるように、私にはとても見えなかった。なぜなら、どの子の顔にも笑顔は一かけらも無く、口をくつとむすんでいて、つまらなさそうにも怒っているようにも見えたからだ。私

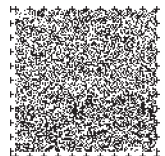


はその写真の横に書いてある説明文を読んで、また驚いてしまった。なんとそれは、今、私が使っているタブレット、ほかに携帯電話やスマートフォン、家庭用ゲーム機器などの電子材料に欠かせないレアメタル（希少金属）の選別作業をしている子どもたちの写真だった。私が最初、「がれき」だと思っていたのは、レアメタルの一つのコバルトという金属をふくむ鉱石だったのだ。

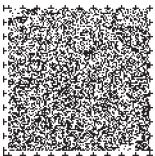
こうして私が何かを知りたいと思った時、どんなことでもすぐに調べることができ、見ることができ、いつも私を助けてくれるこのタブレット。クリスマスマスのプレゼントに両親に買ってもらったお気に入りのタブレット。でも、このタブレットの奥には、粉塵が舞う中、酷暑の中、時には命を落とすこともあるという過酷な労働環境の中で、あどけないあの子どもたちが小さな手で手掘りしたレアメタルが入っているかもしれないのだ。「遠いどこかのきれいに整備されたほこり一つない精密機器の工場で作られ、音楽の流れているきれいなお店にピカピカと並べられ、そして私のところへやってきたんだらうな。」と、ぼんやりとそこまでしか想像していなかった自分をとても恥ずかしく思った。

私は、写真の子どもたちの口を一文字に結んだあの表情、そして、クリアファイルに描かれた男の子の太粒の涙の意味が、今ようやく分かった。

説明によると、その写真が撮られた採掘場は、アフリカ大陸中央部に位置するコンゴ民主共和国にあり、この国は世界トップクラスの鉱産資源国なのだそうだ。しかし、レアメタルという莫大な富をもたらす鉱産資源の奪い合いが原因で何十年も内戦が続き、この国は、今、世界最貧国



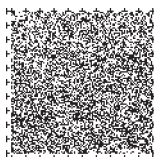
の一つとなっている。
私は悲しくなった。と同時に悔しさが込み上げてきた。なぜなら、大人達の争いによる貧困の犠牲になっているのは、私たちと同じように未来のある「子ども」なのだから。



文部科学大臣賞

輝く未来を生きるために

宮城県 栗原市立若柳中学校 三年

星^{ほし}
日菜^{はるな}

私の家族は六人家族です。父と母、祖父母、私、そして弟がいます。今年中学一年生になったばかりのかわいい弟です。私の小さい頃からの夢は、「弟とけんかをする事」です。よく考えてみれば自分でもおかしい夢だな、と思います。でも、夢はいまだに叶えられていません。

弟が生まれたのは、平成十五年九月です。弟が生まれると聞いた時、私は飛び上がって喜びました。私もそうだったのですが、黄痘がひどく、交換輸血を三回もしました。しかし、症状は改善せず、仮死状態に陥り、一命を取りとめました。脳に重い障害が残りました。脳性麻痺のため弟は話す事も、歩く事も、食べる事もできません。

家族と出かける際、弟は車椅子に乗っています。すれ違った人にじっと見られたり、小さい子が、

「あの子は、何で車椅子に乗っているの。」と質問する声が聞こえることもありましたが。うちの家族は普通じゃないのかな。外出する度に幼い心の中で疑問が膨らんでいきました。

私が幼稚園の時です。夏祭りに家族で出かけた際、私はたくさんの視線を感じ、たまらず母親に聞いたのです。

「何で皆、かなうのことじろじろ見るの。」

「皆、かわいいねって見てるんだよ。」

残念ながら、私にはそう感じられませんでした。誰もかわいいと言わないことを訴える私に、温かい笑顔で母は答えてくれました。

「恥ずかしいから、知らない人にかわいって言わないでしょ。私達がその分、かわいって言うてあげればいいんじゃないかな。」

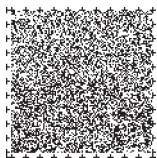
車椅子だから、人と違うから見られることや、障害を卑屈に捉える生き方ではなく、母はありのままを大切に受け入れること、弟の良さをきちんと受け止める必要性を私に教えてくれたのだと思います。

私が保育所に通っている時から、母は弟が皆に受け入れてもらえるよう努めていました。弟を見たことのない友達も、弟を見て

「この子、生きてるの？人形？」

と聞いてきたのです。母は、小さい子にもできるだけ分かりやすく、説明しました。

「大丈夫、生きてるよ。弟なんだけど、ちょっと病気で歩けないの。」

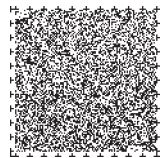


その子は「よろしくね」と弟の手を握り、弟と友達になつてくれたのです。私は心から嬉しく思いました。きちんと説明することで周囲の人達が障がいを理解し、温かく受け入れてくれるよう、母は心を砕いていたのです。

私は、金子みすゞさんの詩「わたしと小鳥とすずと」が大好きです。誰もが素晴らしい長所があり、「みんなちがって、みんないい」というフレーズに、勇気をもらえるからです。障がいがあつても、私達と同じように得意なことがあり、人に元気を与えることができる存在だと、私は思うのです。

弟のチャームポイントは笑顔です。音楽を聴いている時、周りにたくさんの方がいる時、弟の表情はとても嬉しそうです。私も学校であつた出来事を話してあげるので、弟の笑顔を見るととても元気をもらえます。弟の笑顔は、人を癒し元気を与える力があります。

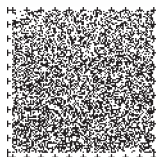
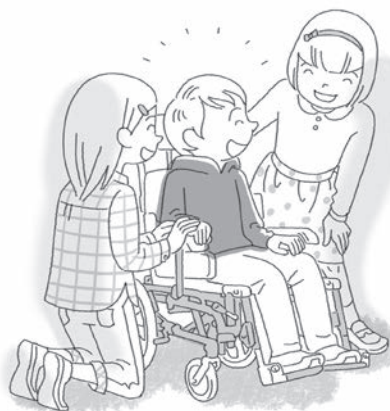
私が小学生の頃、母が迎えに来る時は必ず弟と一緒に迎えに来てくれました。私は弟が大好きなので、本当に待ち遠しい時間でした。私には、障がいのことを多くの人に理解してほしい、という願ひがあります。父や母もちろん同じで、弟を子ども達の輪の中に積極的に連れて行きました。障がいをもつ人達と小さい頃から触れ合うことで差別や偏見がない地域や社会になってほしい、と常々考えているからです。栄養チューブや車椅子の弟を見て、友達の中には最初「気持ち悪い」と言う人もいました。しかし、私の迎えに母と弟が姿を見せる度に、弟の周りには笑顔と人の輪が生まれました。弟の頬や手に触れ、「かわいいね」と言ってくれる友達が増えたのです。弟のおかげで私は人気者でした。両親が心配した偏見の目で見られることやいじめは、全くあり



ません。むしろ、弟を通して病気や障がいへの理解が深まったと感じます。

弟は、私の家族にとって宝物です。弟の名前には、無事に生まれてきますようにという両親の願いが叶うよう、切実な想いが込められています。障がいがあっても弟はどんな交流の輪を広げ強く生きています。障がいを地域や学校、たくさんの人に理解してもらい支えてもらう日々を、私達は生きています。障がいを持つ人にももちろん人権があり、命の輝きに差はないのだと考えます。弟のように障がいがあっても、自分らしく、輝ける場所を求めて頑張る人を、私はこれからも応援したいと思っています。

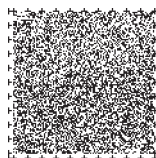
誰もが安心して暮らせる社会のため、障がいのある人に寄り添う日々を、私達の本当の豊かさとして大切にしていきたいです。



法務副大臣賞

ハンセン病を知って学んだこと

栃木県 宇都宮市立一条中学校 二年

東ひがし
大我たいが

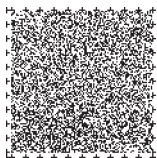
「僕なんかその時に死んどけばよかった。」僕が母のお腹の中で何度も命が危険な状態になったことを聞いた時、母にこう言い放った。僕には吃音の障害があり、吃りを治すため今まで努力してきた。舌の病気がわかった時は舌を切って伸ばす手術もした。目の病気がわかり、メガネでの治療も始まった。なんで僕だけ……という思いが強くなり八つ当たりした。この夏、僕は見失っていた大切なことに気付き、自分の“今”を見つめ直すことができた。

一年前、偶然つけたテレビでハンセン病を知った。それは多磨全生園の敷地内にあるハンセン病資料館を紹介する番組でその事実言葉に言葉を失った。二年生に進級したある日、また同じ番組を見た僕は、二度の偶然に驚いて、ハンセン病が気になり始めた。そんな矢先、連休に資料館に行ってみようよと、母が誘ってくれた。自分の目で確かめるいい機会だと思った僕は資料館を訪れた。

ハンセン病は恐ろしい伝染病、うつると治らないと偏った考えで患者さんを一生閉じ込めた強制隔離の実態に手が震えた。狭い部屋に八人の住居、重症者の看護、土木作業等の労働、結婚しても断種・中絶を強要され、逃亡したり逆らえば監禁室に閉じ込めた。この日本でこんな信じられないようなことが行われていたのかと改めてショックを受けた。その後療養所内を散策した。納骨堂に着いた時、案内人の方から耳を疑うような話を聞いた。生まれてきた赤ん坊の口をガーゼでふさいで抹消し、ホルマリン漬けにされた三十六人の命が眠っているという。どんな小さな命でも生きたいと思つて生まれてきたはずなのに生きられなかったことを思うと心臓をえぐられるような思いになり、僕なんか生まれてこなければよかったと思つたことを悔んだ。赤ん坊が眠る「尊厳回復の碑」に手を合わせ、帰宅した。

数日後、僕は再び資料館に足を運ぶ機会に恵まれた。語り部の平沢保治さんの講演会に参加することができたのだ。八十九歳の平沢さんをテレビで拝見していた僕は親しみを感じて胸が高鳴った。講演が始まると穏やかな表情は消え、強制隔離や全生園での生活等、その時の心境や思いをありのままに話して下さった。らい予防法の知識も深まった。僕と同じ十四歳で発病してから今まで受けてきた差別や屈辱は僕の想像を絶することばかりだったが、「怨念を怨念で返してはいけない」という平沢さんの生き方に強く心を打たれた。

僕は吃音がうつると言われ、手で耳をふさがれた時、何を根拠に言っているのかと悲しくて悔しくて、心がぺちゃんこになった。ハンセン病も、ハンセン病だと疑われただけで人として扱われない社会の暴力が行われてきたのは、病気の知識が少



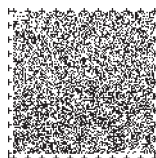
なかったため、必要以上に恐れられたからだ。正しいことを知らないということが心に「偏見」という壁を作り人を傷つける。その壁は僕の心の中にもある。これからは、思い込みや先入観で人を決めつけたりせず、正しいことを知る努力をしていきたいと思った。

平沢さんは僕達に三つの約束事を伝えてマイクを下ろした。①夢や希望をもってほしい。②ありがとう…と言える人間になってほしい。③この地上に一度だけ両親から頂いたこの命、どんなことがあっても大事にしてほしい…と。まるで今の僕を見透かされているようで恥ずかしくなった。僕はハンセン病をテレビで「偶然」知ったと思っていたが、きつと「必然」だったのだと思う。感謝の気持ちもなく親に反発する今の僕だからこそ、聞くべきお話であったのだと、そんな気がしてならない。

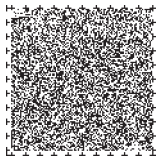
講演後、平沢さんがよく来たね、何年生？と、声をかけて下さった。僕は嬉しくて少しお話しする時間をいただいた。平沢さんは、

「障害に負けないで堂々として生きていきなさい。辛い時悲しい時はいつでもこのじいさんの所に来なさいね。僕は自分の孫のように思っ君を応援しているよ。」

と、僕の手を力強く握り締めてくれた。心のトゲが抜けていくのを僕は確かに感じた。平沢さんは辛い過去をお持ちのはずなのにどうしてあんなに優しくなれるのだろうか。それは平沢さんが相手の気持ちを酌み取って声をかけ、優しく接する思いやりの心を持つておられるからだと思う。思いやりのある人というのは「想像力」を持つてる人ではないだろうか。例えば、困ったり悲しい



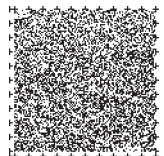
思いをしている人がいたら、自分がその立場になってみて、僕だったらどんな言葉をかけてほしいだろう、どんなふうに接してほしいだろうと、相手の気持ちを想像する力をつけている人だと思う。中学生の僕でも「想像力」を働かせることはできる。それはとても素晴らしい能力だと思う。一人ひとりがその努力をしていけば、いじめや差別は少しずつ減っていくのではないだろうか。人と人がお互いを認め合って生きていくことがどんなに大切か教えて下さった平沢さんの思いを大切に、十四歳の僕が、今、できることをやっていきたい。



法務大臣政務官賞

「小さな人権」

福島県 須賀川市立第二中学校 一年

須田 日菜子
すだ ひなこ

私には、心に決めていることがあります。それは、どんなに小さな子供でも、大人と同じ条件で何かしようとしている時は大人と同じように扱おう、というものです。それは、私が小さなとき、あるスーパーで教えてもらったことです。

私が五歳の頃の話です。

母が不在のある日、父に連れられて幼い私と二人の妹はスーパーに買い物へ出かけました。買い物を終えたその時、母から頼まれていたティッシュペーパーボックスを買い忘れたことに父は気づきました。ところが、折悪く、小さな妹がトイレに行きたいとぐずり始めたのです。

「日菜子、お父さんの代わりにティッシュボックスを買ってくることはできるかい。」
困った父は私を頼るように言いました。

「大丈夫だよ。だからトイレに連れて行ってあげて。」

と答えた私でしたが、実際は一人でスーパールのレジに並んで会計をするなんて初めてでした。商品を見つければ、預かった五百円玉を握りしめてレジに行くと、長蛇の列です。仕方なく、並んで待つことにします。私の前に並んでいるのは、たくさんの商品が入ったカゴを持った中年の女性。後ろはちよつと怖そうな外見の男性です。大人ばかりの列に入ると、五歳の私はとても小さくて、不安気に見えたそうです。私は私で、トイレから戻ってきた父と妹たちがレジから少し離れたところで私を見守っているのを見つけ、少し嬉しくなつて手を振ったのを覚えています。

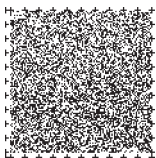
しばらく待って、私の前にいた女性の会計が終わり、私はよいしょ、とボックスを抱え直し、一歩前に出ようとしました。すると、私の後ろの男性が自分のカゴをポンとレジ台におき、

「あと、たばこ一つ。」

とレジの人に声をかけたのです。私は慌てて自分の番だと主張しようと、あの、と言いました。しかし、レジの人はそのままその男性の会計をしようとしています。私が小さくて見えなかったのかもしれないし、前後のどちらかの大人の人と一緒だと思ひ込んだのかもしれない。どちらにせよ、レジは混んでいて、周りの人たちも私のことなど気にも留めていない様子でした。私はもう一度、あの、と声を出しました。ようやく、私の存在に気づいたらうれしいレジの人は、

「ほらそこにいると危ないよ、早くお母さんのところに行つてね。」

と言うのです。為す術もなく周りを見回し、それから遠くにいる父に目で助けを求



めようとしました。しかし、父も何が起こっているのか気づいていないようなのです。このままでは私の順番は永遠に飛ばされてしまう。なんだか悔しくなって、本当に泣きそうになったその時、

「お客様の順番を間違えています。」

というはつきりとした言葉が聞こえました。そのお店の名が入ったネームプレートをつけた年配の方でした。続けてその人は、私の後ろの男の人に向かって、

「すみません、お待たせして申し訳ありませんが、こちらのお客様を先にさせていただいてよろしいでしょうか。」

ときっちりと言ってくれました。

男の人は、あ、ああ、すみません、どうぞどうぞ、と少しきまり悪そうに言いました。どうやらマネージャーさんらしきその人は、次に、私に掌を向けながらレジの人に

「こちらのお客様に謝罪下さい。」

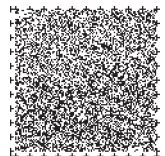
と、静かに告げました。そして、五歳の私に

「失礼な対応をして、誠に申し訳ございませんでした。」

と自ら深々と頭を下げてくれたのです。

幼かった私には、その時何が起こっていたのか本当に理解していたとは言えません。ただ、周りの、レジに並んでいた人たちが大きな拍手をしていたことはしっかりと記憶に残っています。

あの時、あのマネージャーさんは、五歳の私のことを、年齢や性別に関係なく、一人のお客、



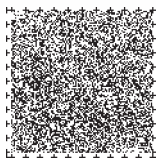
一人の人間として扱ってくれたのだと思います。考えると、店のお客さんの前で従業員を叱る、というのは普通、避けたいことに違いありません。でも、それよりも、私の人権を大切にしてくれた。そのことを、私は今も事あるごとに思い出ししています。

子供だから、その存在に気づかなくても仕方ないだろう。子供だから、こちらのミスもごまかせるだろう。子供だから、こちらが謝らなくても言いくるめてすますことができますだろう。

それは全て間違いだと思います。

五歳のある日、私があの手ネージャーさんにどんなに救われたか、その日のことがどんなに心に刻まれたか。

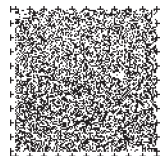
私は小さな子供たちの尊厳と権利の守れる大人になりたい、と思っています。



全国人権擁護委員連合会会長賞

パン一つ買えない日本

香川県 高松市立太田中学校 二年

藤村 勇斗
ふじむら ゆうと

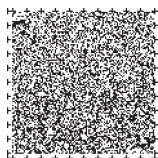
僕たちは小さい時から同じ制服を着て学校に行き、同じ給食を食べ、同じ行動をする。同じことをすることで安心でき、なかま意識ができる。そして皆、同じことが当たり前だと思っっている。それは見方を変えると一つでも違えば、つまみ出される世界でもある。こんな世界って本当に幸せなのだろうか、そんな事を感じた去年の夏の出来事がある。

僕は、母の入院のお見舞に来ていた。その日は早くから病院に来ていて、一階の焼きたてパンを買うことを楽しみにしていた。母は首の傷口から菌が入り、左顔半分が倍以上に赤くはれあがっていた。毛穴から膿も出て目もつぶれていたが、だいぶ元気になり、僕はホッとして喜んでいた。僕が昼前に、母と一緒にエレベーターで一階のパン屋へ向かい、楽しい気持ちと、母においしいパンを食べて元気になってもらいたいという思いで、店へ入ろうとした時、

「ヤベー見ろよ、あれキモッ」「あの顔すごくくない?」「やばいもの見たー」「気の毒」と、ヒソヒソと、やりのような視線と声が聞こえてきた。あたりを見ると、振り返って見る者、わざわざ店の前に戻ってくる者、パン屋の周りは、異様な雰囲気になった。僕はトレイを取るのをやめ、代わりに母の手を取り、すぐに店を出て、人気のない電話ボックスの陰に隠れた。とっさに、どうしてそんな行動をとったのか自分でもよく分からないが母を見せたくないのか、自分が恥ずかしかったのか、ともかくそこに立っていられなかったのは事実だった。僕は、肩でハァーハァーと息を切らして興奮がおさまらなかった。今まで体験したことのないような圧力を感じた。身体の暴力以外にこんな暴力があるのだと感じた。そして集団の恐ろしさも感じた。母は、僕の背中をさすりながら、「ごめんよ、ごめんよ。」と、言い続けた。つぶれた目からこぼれる涙を見て、僕は我に返った。どうして母が謝るのか、どうして僕たちがここに隠れてなければいけないのか、ただ不思議を通り越して怒りに変わっていた。母は、お金を渡すから一人で行っておいでと言った。しかし、僕は、「何も悪い事はしていない、堂々とすればいいんだ。それに、一緒に行かないと意味がないんだ。」と訴えた。このままでは、得体の知れない何かに負けてしまいうそで、逃げてしまおうと一生後悔しそうな気がした。母の手をまたつかみ、店へ行った。案の定、やっぱりみんなの変わった者を見るような視線が突き刺さった。震える手でトレイをしっかりつかみ、

「母さん、どのパンが一番おいしそっかなー。」

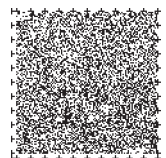
と大声で言いながら、店の中を回った。その間、どれだけの言葉や視線の攻撃を受

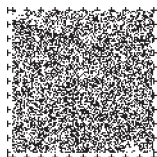


け続けたことか。僕は、何も感じない心をわざとつくり、それを保ち続けるしかなかった。

病室に戻り、母は隣の人に僕の行動をうれしそうに話していた。ほめてくれるのはうれしいけど、自慢できる行動でもなかったと思った。

僕は、窓の外を見ながらパンを食べた。この雲一つない青い空の下、いったいどれだけの人が自由に外に出ているんだろう。美しい物を見て美しいと感じ、甘いにおいをかいで笑顔があふれ、心地よい音楽を聴いて、心はずむ。本当に全ての人ができているのだろうか。誰もが自由に楽しむ権利はあるはずなのに、僕達は自分と違う者を除外したがる弱い気持ちがある。同質の者は受け入れるが、何か変わっていると、変わり者、別物とみなし、なかまに入れたがらない。歴史的にも特に江戸時代には厳しい身分制度や差別があった。しかし、もう時代は変わったのだ。僕は、一人一人がもう少し心に一センチでもいい、異なるものを受け入れるすき間をつくってほしい。容姿、障がい、人種や宗教等、異なるものを受け入れて認める心を少し広げれば解決できることなんだ。全ての人間は同じように幸せに生きる権利がある。そして、それを奪う権利は誰にもない。みんな平等で、自由でなくてはならない。自分の認めた者だけが幸せというのは、本当の幸せじゃないんだ。異文化、異民族等異質のものを認め受け入れる広い心が一人一人にあれば、この青い空の下もっと多くの笑顔と笑い声が聞こえてくるはずだ。そんなことを考えながら食べたチョコクリームたっぷりのパンが少しにがく感じられた初夏の一日だった。





一般社団法人日本新聞協会会長賞

なぜ、祖父母と向き合えないのか

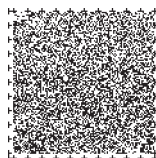
埼玉県 狭山市立中央中学校 三年

齊藤 美沙子
さいとう みさこ

私には、八十代の祖父母がいます。けれど、恥ずかしいことに長い間、きちんと向き合うことが出来ませんでした。

祖父は認知症がかなり進んでいます。「美沙子だよ。おじいちゃんの孫だよ。」と言っても「みさこ。あれっ。ええと……。」となかなか分かってもらえません。そのようなやりとりが続くと次第に私は不安になります。祖父の部屋に飾られた私の書初め作品も、誰が書いたものなのか分かっていないそうです。このまま忘れられてしまったら。そう思うと、段々と自分から話ができなくなってしまうました。

祖母は両足の股関節の手術をしているために杖なしでは歩行できません。だからこそ私が優しく声をかけたり、手を貸してあげたりしなければいけないということは分かっています。分かっ

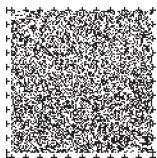


ているのですが、「何だか照れくさい」という気持ちに負けてしまいます。さらには、いずれ自分もこのように体を動かせなくなるのでは、という恐怖さえも覚えてしまい、ますます自分から手助けをすることが出来ずにいました。

そのような祖父母ですが、幼い頃の私はよく面倒をみてもらっていました。おんぶや抱っこはもちろんのこと、一緒にトランプやオセロで遊んでもらったり、お弁当を作ってピクニックに連れていってもらったり、おままごと用のいすを作ってもらったりと、とにかくたっぷりの愛情を注いでもらいました。それなのに、なぜ自分は手を差し伸べることができないのでしょうか。不安や悲しみ、照れくささ、そんなことで二の足を踏んでしまう自分がとても情けないです。

そんなある日のことです。朝、いつものように新聞を読んでいると、投稿欄に私と同じ中学三年生の投稿を見つけました。私は、同じ年齢の人が投稿していることにも驚きましたが、何よりもその内容に強く心を打たれました。彼は幼い頃に祖父母を病気で亡くし、会いたくても会えない。恩返しをしたくてもできない。それはまさに私自身の未来を予言しているかのようでした。「このままでは絶対に後悔する。祖父母と話せることは、それだけですごく幸せなことなんだ。」変わろう。特別なことでなくていい。自分から声をかけたり、手をさしのべたり。当たり前のことを当たり前のように、今までの恩返しが少しでもできるように。変わろう。そう決意しました。

それから一ヶ月が経ち、祖父母の家に修学旅行のお土産を渡しに行きました。祖父は生八つ橋を口にしながら何度も「こりゃあ美味しいなあ。ありがたいなあ。」と



喜んでくれました。また祖母は、昔、夫妻で清水寺を訪れた思い出を懐かしそうに話してくれました。隣では「そうだそうだ。」と祖父も嬉しそうに頷いて、母も含めて四人で京都の思い出を語り合い、とても楽しいひと時となりました。

そうそう、忘れられないすてきなエピソードがもう一つ。祖父の部屋に飾られた

私の書初め。それを見た祖父が「こりゃあうまいなあ。誰が書いたのだからあやあ。」と言いました。「みさこが書いた〈素直な心〉っていう字だよ。」

「そうかあ。人間は素直で正直が一番大事だいなあ。それから、人から信頼される人間になりたいなあ。」

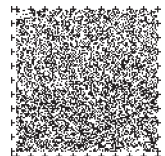
それを聞いて私は、今まで誰のか分からずただ飾っているだけ、とふてくされていた自分が恥ずかしくなりました。心を込めて書いた字は祖父の心にもきちんと届いているのだ、と。

「あれっ、みさこっていうのは、俺の新しい嫁さんだっけかやあ。こんな若くてかわいらしい嫁さんがいたのじゃあ、俺もあと少しだけ頑張るかな。」

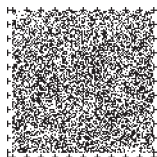
冗談なのか本気なのか、祖父の言葉は皆を笑顔にさせてくれました。

人は少し記憶することが困難になったり、体が不自由になることがあります。けれど、それだけで人の価値が決まるわけではありません。大切なのは心が健やかであること。優しさと思いやりの心を持った祖父母は私の誇りです。祖父母の力になりたい、と思っていました。実はまだまだ祖父母から学ぶことのほうが多いと今では感じています。

近頃、ご近所の高齢者の方と話す機会が増えました。先日は九十九歳のおばあちゃんが自分で



育てたお野菜を持って来て下さり、私の曾祖父にお世話になって感謝していると話してくれました。「人から信頼される人間になりたいなあ。」と言った祖父の言葉を思い出しました。私も曾祖父のように人から信頼される人間になりたいと思うと同時に、常に感謝する気持ちを忘れないことのおばあちゃんのように年を重ねていきたいです。



日本放送協会会長賞

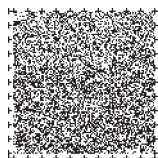
感謝

高知県 須崎市立須崎中学校 三年

村上 むらかみ
一矢 かすや

僕は、母のお腹にいる時に「水頭症」という病気になり、生まれてすぐに手術をしましたが、ずい液がもれたことで足先に神経が通わなくなりました。そのため、生まれたときから、足首の感覚がないという障害があり、何も持たずに立つことができせん。今は、生活のほとんどの場面です。車椅子を使っています。生まれた時から障害があつたので、僕自身はあまり気にしたことはありません。

保育園の時は、車椅子を自分でこぐというのは無理だったので、あまり使うことはありませんでした。使っても大人の手を借りることがほとんどでした。僕は、車椅子を使うよりも、家の中や保育園を這ったり、上半身だけの力で移動したりしていました。僕は、みんなと遊びたいという気持ちが強く、みんなも一緒に遊んでくれました。外で遊ぶことも多く、その姿を見た祖父が



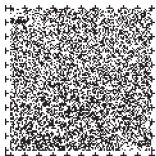
僕のために靴を買ってくれました。そのまま履いてもすぐに脱げてしまうので、脱げないように工夫もしてくれました。僕は、その靴のおかげで、みんなと外で遊ぶことができました。

小学校に入学し、学校での生活が始まりました。小学校では、担当の先生がついてくれて、移動など補助をしてくれました。車椅子の使い方に慣れていなかったもので、たくさん迷惑をかけたと思います。でも、僕がみんなと同じように学校生活を送れるように助けてくれました。

今、小学校生活を振り返ると、僕はたくさんの友達にも支えられてきたと思います。最初は、「どうしたか。」と、聞かれましたが、すぐにみんなは障害に関係なく接してくれました。僕が何も言わなくても動いてくれたり、僕が何か頼んだ時は、嫌な顔やめんどくさい顔など一切せず、助けてくれたりしました。僕は、本当に嬉しかったです。友達や先生がいたから、足に障害があっても、みんなと同じように六年間運動会に出ることもできました。また、六年生の時には、修学旅行に行つて楽しい思い出を作ることできました。

中学校でも同じです。僕は、たくさんさんの友達と先生方に支えられ、今、生活を送っています。僕は周りの友達や先生方、両親、祖父母にとっても感謝をしています。それは、障害がある僕に、普通に接してくれているからです。

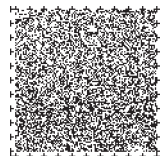
でも、僕は来年の三月には中学校を卒業します。友達や先生が、いつまでも当たり前のように、僕のそばにいてくれるわけではありません。これからは、一人でできることを増やさなければなりません。今、僕の周りには、僕のことを分かってくれているので、何も言わなくても動いてくれます。しかし、高校や社会に出れば、



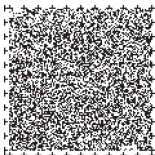
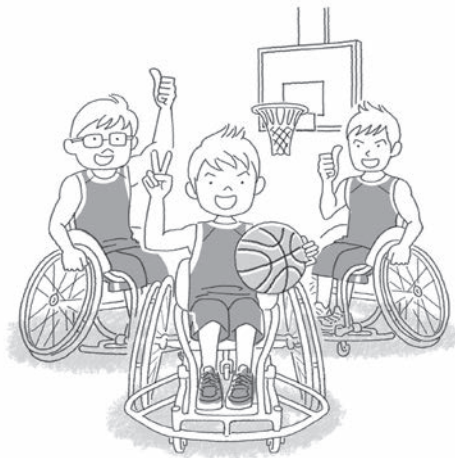
今までのようにはいきません。今でも、時々、周りが知らない人ばかりの時や、人混みに入った時などは、自分から、「すみません。」と、声をかけなくてはいけない場面もあります。僕はまだまだ一人で生活を送ることに対して不安がありますが、今まで僕を支えてくれたみんなのためにも頑張ろうと思います。

僕は今、車椅子バスケットをしています。きっかけは、小学校五年生の時の担当の先生が、障害者スポーツセンターのイベントがあることを教えてくれ、それに参加したことです。色々なスポーツを体験しました。そのイベントが終わった後、今僕が所属しているチームの高知シードラゴンズに声をかけてもらいました。初めて練習に参加した時は、車椅子同士がぶつかるところや、車椅子ごとこけたりする様子を見て怖かったことを覚えています。また、シードラゴンズのメンバーが僕より年上の人ばかりだったので、打ち解けるのに時間がかかりました。でも僕は、車椅子バスケが大好きで、どんなにしんどくても練習を休んだことはありません。他のメンバーにも支えられ、今では色々な試合に出ることができるようになりました。初めてシユートを入れることができた時は、本当に嬉しかったです。僕は、車椅子バスケットに打ち込むことで、自信もつきました。これまで、人前であいさつをしたり、発表をしたりすることが苦手でしたが、勇気を出して挑戦してみようという気持ちを持つことができました。

僕の今の夢は、二〇二〇年の東京パラリンピックに出場することです。とても大きな夢ですが、僕は目標を持って努力し、その夢を絶対に叶えたいと思います。今まで僕を支えてくれた周りの人たちに、僕の活躍する姿を見せたいと思います。



今まで支えてくれた友達や先生方、両親や祖父母、車椅子バスケのメンバーへの感謝の気持ちを伝えるためにも、夢を実現できるように、頑張ります。



法務事務次官賞

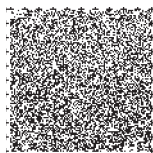
私を生きる

東京都 新宿区立四谷中学校 三年

上田 うえだ
倫子 りんこ

七・六パーセント。この数字を聞いてあなたは何を想像するだろうか。これは日本の人口の左利きの人やA B型の人の割合にもほぼ一致する数字だそうだ。しかし、今から話そうとしていることは決してそのようなことではない。実はこの数字は、ある団体が調査した日本のレズビアン、ゲイ、バイセクシユアル、トランスジェンダーなどの性的少数者の割合なのだ。この数字を多いと捉えるか少ないと捉えるかは人それぞれだが、私はとても多いように感じる。私の周りだけでも左利きの人やA B型の人は何人もいる。それを性的少数者の人数に置き換えて考えてみると、性的少数者は、認識されていないだけでかなりの数がある、ということがわかるだろう。

ここ最近、メディアでのオネエブームやジェンダーフリーの風潮によって、性的少数者とそうでない人との壁は徐々に低くなりつつあるようだ。しかし、抱き合っただけじゃられる同性どうしの友



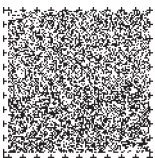
だちを見て、同級生が

「おまえらホモかよ。」

というような発言をしたり、女っぽい話し方やしぐさが目立つ男子を笑ったりするということはまだ見られる。このような時、私は非常に残念な気持ちになる。それらの言動には、無意識であれ性的少数者を差別する心が表れていることを感じてしまうからだ。

私は生まれてきたときに女性という性を受けた。しかし、物心ついたときから、常に男女どちらの性でもいたい、という気持ちを持っている。フリルやリボンのついた女の子らしい物があまり好きではなく、スカートを履くということも恥ずかしかった。小学生の頃は、クラスの男の子のように一人称が「俺」だった頃もあった。しかし、成長するにつれて周りの女の子の友だちが綺麗に、おしゃれになっていくのを見て、自分が女という性で生まれてきたことへの喜びも感じられるようになった。そして、いつしか自分の心の中に男性のようにも女性のようにもありたいという二つの思いが存在するようになった。そのことを自覚したとき、目の前の霧がぱつと晴れたような気持ちになったことを鮮明に記憶している。それと同時に、「どうしよう」という不安と戸惑いの気持ちが生じた。「自分はおかしい人間なのだろうか」という問いが頭の中をぐるぐると回った。このことを打ち明けてしまったら、両親、祖父母、親戚、親しい友だち、全ての人が私と今までのように接してくれなくなるかもしれない、と一瞬恐ろしくなったのだ。

私がこのような不安と戸惑いの気持ちを抱いたのは、人間は誰でも自分とは違う

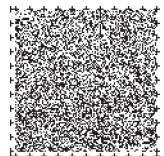


ものを否定したくなる性質を持っていると私自身が考えているからだ。そのような性質は性的少数者だけではなく、有色人種、障がい者、在日外国人などへの差別意識にも通じていると思う。ではなぜ、そのような差別意識が育ってきてしまうのだろうか。私は、原因は家庭環境や幼い頃の経験にあるのではないかと考えた。人間の

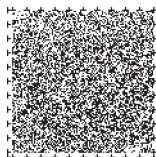
の成長していく過程で幼少期は、保護者や身近な人の影響を受けやすい時期だ。そういった時期に家庭内や学校などでの会話や雰囲気 endpoint に差別意識が存在すると、その情報を一気に吸収し、自分の考えの一部となっていくてしまうのではないだろうか。

今の私には、自分の性の認識への恥ずかしさは全くない。それはきっと、私の育ってきた環境や様々なものとの出会いが影響している。例えば私は小さい頃から両親を通じて多様な人との出会いがあった。その中には数人の同性愛者の男性もいて、いつもありのままに堂々と生きるその姿を私はとても美しいと感じた。また、私の大好きな女性ミュージシャンは同性愛者だ。彼女は自身の曲や生き方などを通して人と違うことは誇りに思うべき個性なのだと教えてくれた。その他にも、本やインターネットから知り得た性的少数者についてのことなど、すべてが私に「身体は女でも心は両性」という性のあり方を「一つの個性」という風に思わせてくれた。

昨年十一月には、渋谷区で同性カップルに同性パートナーシップ証明書を発行するという制度が作られた。これにより同性愛者だけでなく様々な性的少数者に対する社会の理解が深まってくたろう。しかし、差別意識というものを完全になくするのは実際にはかなり難しいことだと思う。かく言う私も「あなたは今、差別意識を全く持っていないのか。」と問われるとすぐに「はい。」



とは答えられない。だがこの多様な世界を生きてゆく中で私たちには、自分の思う「普通」が世間の「常識」なのだという考えを捨て、新たな視点を持つことのできる柔軟な姿勢が求められるのではないだろうか。そして人を性別や見た目で判断せず、その人の持つ「その人らしさ」を一つの「個性」として、受け入れることのできる世の中になってほしいと思う。どんな個性を持っていたとしても、その人は「かけがえのない人」に変わりはないのだから。

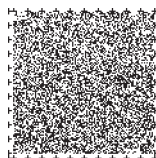


法務事務次官賞

僕の色から見えたこと

長野県 学校法人松商学園松本秀峰中等教育学校 二年

木山沢 きやまざわ
奏斗 そうと



私には先天性の色覚異常があります。「色覚」とは色を識別する感覚のことで、そこに異常が生じています。例えば赤と緑、緑と茶、オレンジと黄緑など区別のつきにくい色があります。そしてそのことで見え方が正常な人と少し違うということが色覚異常です。先天性の場合は原因が遺伝的なものなので現時点では有効な治療法はありません。けれど先天性の色覚異常は日本人男性の5%、女性の0.2%の頻度で起きていて男性では20人に一人と言われています。私が色覚異常だとわかったのは小学二年生の時でした。

「奏斗の龍だけ違うよ。」

ポツリと友達が言いました。それはクラスで龍の子太郎の物語から自分の好きな場面を描いてみよう、という図工の授業をして、出来上がった作品を先生が廊下に飾り終えた時のことでした。

私には友達の言っている意味が理解できませんでした。廊下にならんだみんなの絵は様々な表情のそれぞれの龍の子太郎と母龍でどれ一つとして同じ龍ではなかったからです。

「どこがちがうの?」

と、とつさに理由を聞けなかった私はこの日の出来事を母に話しました。数日後参観日があり、母が見つけてくれました。

「この前言っていた龍の子太郎、みんなの龍は緑色をしてたけど奏斗の龍は茶色だったからかもしれない。」

色覚異常とわかった時、眼科の先生は

「心配いらないよ。みんなと少し見え方がちがうだけだよ。」

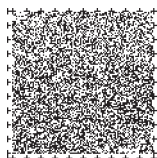
とやさしくおっしゃいました。けれど私は

「みんなと見え方がちがうってみんなはどう見えるんだろう。」

と心の中がもやもやして気になって仕方ありませんでした。きっと私は「みんなと違う」ということが不安で怖かったからなのだろうと思います。もしかしたらいじめられるかもしれないと思っていたのかもしれません。そんな時、父が

「みんなと違ってもいいじゃないか。奏斗はみんなの見えない色が見えるようになるかもしれないぞ。」

と言ってくれました。私はこの言葉に何か特別なものが見えるようになる気がする少し心が救われました。



あれから六年が経ちます。眼科の先生が言われたように時々、色に迷うことがあっても生活そのものに何も不便はありません。けれど私はこのハンディキャップを通じて、自分が思っている以上に他人を気にしている弱い自分と向き合うことができませんでした。最初は友達がどの絵の具を選んでいるかを確認してから自分もその色を選んでいました。でもだんだん自分から

「これ何色？」

と聞けるようになり、そのうちに

「いや。自分の見たままを塗ろう。」

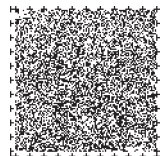
という気持ちに変わっていったのです。少しずつですが私は自分自身を受け入れることができたのだと思います。父は

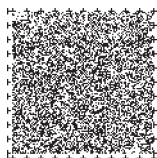
「見えない色が見えるようになる。」

と言いました。それは

「違いのある一人一人の人間を認められるようになれ。」

と伝えたかったのかもしれませんが。世の中には人種、性別、障害などの様々な違いに差別されることがあります。けれどそもそも人間は誰一人として同じではありません。私は胸をはりありのままの自分で生きていきたいと思います。そして相手のありのままもよく知って、受け入れていきたいと思います。人権を尊重するということはお互いのありのままを認め合うことではないでしょうか。まずは身近な友達の中に信頼関係を築いていくことから始めていきたいと思えます。



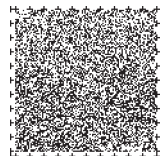


法務事務次官賞

大分、今日も元気です

大分県 大分大学教育学部附属中学校 三年

佐藤 千慧
さとう ちさと



ガッ、ガッ。寝ている私の体の芯を突き上げるような揺れ。「ピーピー、地震です、地震です」緊急地震速報が追い打ちをかけるように、恐怖心を駆り立てる。もうやめて、と何度も何度も心の中で叫んだ。

熊本・大分地震から、約四か月が過ぎようとしている。体から、やっと揺れの感覚や、耳の奥でくりかえす、緊急地震速報は鳴り止んだ。しかし、その日々の中で、日に日に大きくなっていくものがある。それは、四月十四日の熊本・大分を地震が襲った、次の日の出来事だ。

「お一人様、一つまでとさせて頂いております」「家族様、お一つまでです」そんな言葉が飛び交う。朝一番、普段はすいている道も、車で埋め尽くされていた。みんな、必死だった。今夜も地震は来るかもしれない、という底知れぬ恐怖を相手に、必死になっていた。そしてまた、私

もそのうちの一人だった。姉と買い出しに来た私は、まずは水を確保するように、と言われ、販売コーナーを指した。そこで、私が見たものは、目を光らせて我先に、と水をカートに入れている人々だった。お店の人が、次から次へと在庫を出しているが、陳列よりも、陳列棚からなくなるスピードの方がはるかに速かった。「すみません、今日の在庫はこれまでにあります」その言葉を聞くと、群がっていた人々は早足でさっさと退散していった。

「どうしようか…。」

小さく、ため息交じりに腰の曲がったおばあさんがつぶやいていた。人だかりの中、このおばあさんが、水を買うことができなかったのだらうと、容易に想像できた。しかし、私の腕の中には、一つのペットボトルしかない。家族のために必要な一本。だから、簡単にはこれどうぞ、とは言えなかった。悩んでいる私の横を大学生くらいの男の人が通り抜けていった。彼が行った先には、あのおばあさんが。

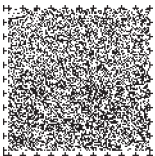
「どうぞ、俺、ほかの店行くんで。」

そう言っただけの何のためらいもなく、おばあさんに水を差し出していた。

「ありがとう。腰が悪くて、やっと歩いてきたんだけど、水も買うことができなくてね。どうしよう、って思っていたんだよ。助かったよ、本当に、本当にありがとう。」

おばあさんがほほ笑むと、男の人は照れくさそうに、人混みの中に消えていった。ほんの数秒のこの出来事が、私の中で日に日に大きくなっていく。

私は、この経験を通して、私自身は、自由に歩いたり、逃げるができる。し



かし、見渡してみると、出会ったような、腰の悪いおばあさんや、杖を使つて歩いている人、車椅子に乗り、膝にかごを乗せて買物をしている人も知った。このような人は、地震の時私以上に、どこに逃げたらいいのだろうか、停電して、足元が見えない状況で、不安で、立ち尽くしてしまうのではないか、と思った。自分も危う

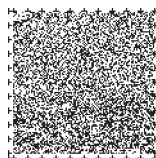
い状況、恐怖はあるけれど、その中で、私の出来ることは、避難所に行く際、隣の家のおじいさんとおばあさんに声を掛け、隣を寄り添いながら、歩幅を合わせ、歩くこと。避難所で毛布を配る時に、ただ配るだけでなく、笑顔も配ること。できることは限られているけど、前向きに行動することが、その限界の壁を少しでも壊していける、と私は考えた。

「いこうぞ。」

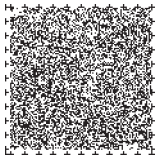
「ありがとね、その気持ちがとてもうれしいよ。」

四月の地震は、決して無駄にはしない。地震を経験したことで、私は学んだ。先日、私は初めてバスの席を譲った。きつと今までの私なら、迷いやためらい、わざわざ自分から関わりに行く事はないだろう。行動に移すことはなかっただろう。しかし、四月十五日の経験が私を後押しし、自分から、積極的に関わりを持ち、行動に移すという選択肢を選ばせた。実際に行動してみると、日常生活で生かしていけることは、たくさんあるのだと実感したし、自信がついた。そして何より、私が席を譲ったおばあさんの柔らかい笑顔は、私の次の行動への力と、勇気をくれた。

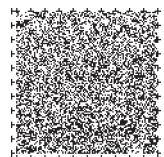
四月十五日。この日は、私の人生の大きな分岐点となった。災害は自然が相手のため、止めること、人間が太刀打ちすることはできないかもしれない。しかし、対策をとること、人と人が



手を取り合い、心を寄せ合うことはできると学んだ。今回の地震の風評被害で、温泉県である大分は、一時はキャンセルが相次ぎ、にぎやかだった観光の通りは、静かになった。しかし、そんな地震に負けないくらい、温かい人が多い場所、心が休まるほっこりできる場所、笑顔のパワーがみなぎる場所、それが大分県。大分、今日も元気です。

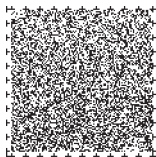


法務局・地方法務局名	郵便番号	所在地	電話
金沢地方法務局人権擁護課	921-8505	金沢市新神田4丁目3番10号 金沢新神田合同庁舎	076-292-7804
富山地方法務局人権擁護課	930-0856	富山市牛島新町11番7号 富山合同庁舎	076-441-6376
大阪法務局人権擁護部	540-8544	大阪市中央区谷町2丁目1番17号 大阪第2法務合同庁舎	06-6942-9492
京都地方法務局人権擁護課	602-8577	京都市上京区荒神口通河原町東入 上生洲町197番地	075-231-0131
神戸地方法務局人権擁護課	650-0042	神戸市中央区波止場町1番1号 神戸第2地方合同庁舎	078-392-1821
奈良地方法務局人権擁護課	630-8305	奈良市東紀寺町3丁目4番1号 奈良第2法務総合庁舎	0742-23-5457
大津地方法務局人権擁護課	520-8516	大津市京町3丁目1番1号 大津びわ湖合同庁舎	077-522-4673
和歌山地方法務局人権擁護課	640-8552	和歌山市二番丁2番地 和歌山地方合同庁舎	073-422-5131
広島法務局人権擁護部	730-8536	広島市中区上八丁堀6番30号 広島合同庁舎3号館	082-228-5790
山口地方法務局人権擁護課	753-8577	山口市中河原町6番16号 山口地方合同庁舎2号館	083-922-2295
岡山地方法務局人権擁護課	700-8616	岡山市北区南方1丁目3番58号	086-224-5761
鳥取地方法務局人権擁護課	680-0011	鳥取市東町2丁目302番地 鳥取第2地方合同庁舎	0857-22-2289
松江地方法務局人権擁護課	690-0886	松江市母衣町50番地 松江法務合同庁舎	0852-32-4260
高松法務局人権擁護部	761-8077	高松市出作町585番地4	087-815-5311
徳島地方法務局人権擁護課	770-8512	徳島市徳島町城内6番地6 徳島地方合同庁舎	088-622-4171
高知地方法務局人権擁護課	780-8509	高知市栄田町2丁目2番10号 高知よさこい咲都合同庁舎	088-822-3331
松山地方法務局人権擁護課	790-8505	松山市宮田町188番地6 松山地方合同庁舎	089-932-0888
福岡法務局人権擁護部	810-8513	福岡市中央区舞鶴3丁目5番25号 福岡第1法務総合庁舎	092-739-4151
佐賀地方法務局人権擁護課	840-0041	佐賀市城内2丁目10番20号 佐賀合同庁舎	0952-26-2148
長崎地方法務局人権擁護課	850-8507	長崎市万才町8番16号 長崎法務合同庁舎	095-826-8127
大分地方法務局人権擁護課	870-8513	大分市荷揚町7番5号 大分法務総合庁舎	097-532-3368
熊本地方法務局人権擁護課	862-0971	熊本市中央区大江3丁目1番53号 熊本第2合同庁舎	096-364-2145
鹿児島地方法務局人権擁護課	890-8518	鹿児島市鴨池新町1番2号	099-259-0684
宮崎地方法務局人権擁護課	880-8513	宮崎市別府町1番1号 宮崎法務総合庁舎	0985-22-5124
那覇地方法務局人権擁護課	900-8544	那覇市樋川1丁目15番15号 那覇第1地方合同庁舎	098-854-1215



問合せ先一覧（法務局・地方法務局）

法務局・地方法務局名	郵便番号	所在地	電話
札幌法務局人権擁護部	060-0808	札幌市北区北8条西2丁目1番1 札幌第1合同庁舎	011-709-2311
函館地方法務局人権擁護課	040-8533	函館市新川町25番18号 函館地方合同庁舎	0138-23-9528
旭川地方法務局人権擁護課	078-8502	旭川市宮前1条3丁目3番15号 旭川合同庁舎	0166-38-1114
釧路地方法務局人権擁護課	085-8522	釧路市幸町10丁目3番地 釧路地方合同庁舎	0154-31-5014
仙台法務局人権擁護部	980-8601	仙台市青葉区春日町7番25号 仙台第3法務総合庁舎	022-225-5739
福島地方法務局人権擁護課	960-0103	福島市本内字南長割1番地3	024-534-1994
山形地方法務局人権擁護課	990-0041	山形市緑町1丁目5番48号 山形地方合同庁舎	023-625-1321
盛岡地方法務局人権擁護課	020-0045	盛岡市盛岡駅西通1丁目9番15号 盛岡第2合同庁舎	019-624-9859
秋田地方法務局人権擁護課	010-0951	秋田市山王7丁目1番3号 秋田合同庁舎	018-862-1443
青森地方法務局人権擁護課	030-8511	青森市長島1丁目3番5号 青森第2合同庁舎	017-776-9024
東京法務局人権擁護部	102-8225	千代田区九段南1丁目1番15号 九段第2合同庁舎	03-5213-1234
横浜地方法務局人権擁護課	231-8411	横浜市中区北仲通5丁目57番地 横浜第2合同庁舎	045-641-7926
さいたま地方法務局人権擁護課	338-8513	さいたま市中央区下落合5丁目12番1号 さいたま第2法務総合庁舎	048-859-3507
千葉地方法務局人権擁護課	260-8518	千葉市中央区中央港1丁目11番3号 千葉地方合同庁舎	043-302-1319
水戸地方法務局人権擁護課	310-0011	水戸市三の丸1丁目1番42号 駿優教育会館	029-227-9919
宇都宮地方法務局人権擁護課	320-8515	宇都宮市小幡2丁目1番11号 宇都宮地方法務合同庁舎	028-623-0925
前橋地方法務局人権擁護課	371-8535	前橋市大手町2丁目3番1号 前橋地方合同庁舎	027-221-4426
静岡地方法務局人権擁護課	420-8650	静岡市葵区追手町9番50号 静岡地方合同庁舎	054-254-3555
甲府地方法務局人権擁護課	400-8520	甲府市丸の内1丁目1番18号 甲府合同庁舎	055-252-7239
長野地方法務局人権擁護課	380-0846	長野市大字長野旭町1108番地 長野第2合同庁舎	026-235-6634
新潟地方法務局人権擁護課	951-8504	新潟市中央区西大畑町5191番地 新潟地方法務総合庁舎	025-222-1563
名古屋法務局人権擁護部	460-8513	名古屋市中区三の丸2丁目2番1号 名古屋合同庁舎第1号館	052-952-8111
津地方法務局人権擁護課	514-8503	津市丸之内26番8号 津合同庁舎	059-228-4193
岐阜地方法務局人権擁護課	500-8729	岐阜市金竜町5丁目13番地 岐阜合同庁舎	058-245-3181
福井地方法務局人権擁護課	910-8504	福井市春山1丁目1番54号 福井春山合同庁舎	0776-22-4210



これまでの全国中学生人権作文コンテストの入賞作品を題材とした人権啓発ビデオです。
YouTubeの法務省チャンネル (<https://www.youtube.com/user/MOJchannel>) から
ご覧いただけます。

また、前掲している全国の法務局・地方法務局又は公益財団法人人権教育啓発推進センターの人権ライブラリー (03-5777-1802) での貸出しを行っておりますので、お問い合わせ
ください。

法務省委託
平成25年度 人権啓発ビデオ

わたしたちの声 3人の物語

「全国中学生人権作文コンテスト」入賞作品をもとに

いじめをなくす
ために、今

温かさを分け合って

リスペクト
アザース

45分 (収録15分)
字幕・原音入り
法務局の予約可

監修 全国人権啓発推進委員会
企画 法務省人権課啓発部
公益財団法人人権教育啓発推進センター
制作 株式会社 桜葉新社

わたしたちの声 3人の物語～「全国中学生人権作文コンテスト」入賞作品をもとに～

法務省委託
平成26年度
人権啓発ビデオ

朗読

審査員長からの
メッセージ 5分
全国中学生人権作文コンテスト
中央大会審査員長 啓発部
落合孝子

澤田福臣 (朗読)

大和田南那 (朗読)

電車内に
咲いた、
笑顔の花 2分30秒

NO!と言えぬ
強さをもち
ハンセン病
から解放に
2分30秒

本当の
国際化とは 7分30秒

立ち止まる 5分

絆 6分30秒

未来を拓く5つの扉

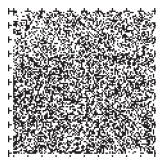
～全国中学生人権作文コンテスト入賞作品朗読集～

46分 字幕・原音入り
法務局の予約可

録音
アニメーション
できる

企画
法務省人権課啓発部
公益財団法人人権教育啓発推進センター
制作
株式会社 桜葉新社

未来を拓く5つの扉～全国中学生人権作文コンテスト入賞作品朗読集～



第36回全国中学生人権作文コンテスト中央大会審査員

作家（審査員長）	落合恵子
映画監督	山田洋次
一般社団法人日本新聞協会事務局長	國府一郎
日本放送協会解説委員室解説委員	清永聡
文部科学省初等中等教育局視学官	湯川秀樹
全国人権擁護委員連合会会長	内田博文
法務省人権擁護局長	萩本修

（敬称略）

感想をお聞かせください

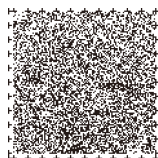
本作文集を読まれた感想等を下記の連絡先又は keihatsu@i.moj.go.jp までお寄せください。

転載について

本作文集の作品を、印刷物やインターネット上に掲載する場合は、下記の連絡先までお知らせください。

詳しくは、法務省ホームページ (<http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken111.html>) を御覧ください。

〈連絡先〉〒100-8977 東京都千代田区霞が関一丁目1番1号
法務省人権擁護局人権啓発課
TEL 03 (3580) 4111 内線5875



印刷 平成29年1月26日
発行 平成29年2月4日
発行者 法務省人権擁護局
全国人権擁護委員連合会
東京都千代田区霞が関一丁目1番1号
電話 03(3580)4111 内線5875
URL <http://www.moj.go.jp/JINKEN/>

「いじめ」や暴力行為等は人権侵害です。
法務局・地方法務局では、
人権侵害による被害を受けた方を
救済するための活動を行っています。
お気軽にご相談ください。



人権イメージキャラクター
人 KEN まもる君・人 KEN あゆみちゃん

入賞作文集のデータは、法務省ホームページに掲載しています。

<http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken111.html>

子どもの人権110番 (全国共通)  0120-007-110 ゼロゼロなのひやくとおぼん
通話料無料

みんなの人権110番 (全国共通)  0570-003-110 ゼロゼロみんなのひやくとおぼん

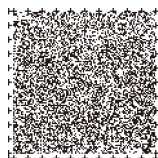
女性の人権ホットライン (全国共通)  0570-070-810 ゼロナナゼロのハートライン

インターネット人権相談受付窓口  インターネット人権相談 

パソコンからは <http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken113.html>

携帯電話からは http://www.moj.go.jp/k/SOUDAN/JINKEN/index_k15.html

人権ライブラリー <http://www.jinken-library.jp/>



Human Rights
法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会

リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。